

| | |
|------------------|---|
| Title | 統計学：福澤諭吉から横山雅男へ |
| Sub Title | |
| Author | 西川, 俊作(Nishikawa, Shunsaku) |
| Publisher | 慶應義塾福澤研究センター |
| Publication year | 1991 |
| Jtitle | 近代日本研究 Vol.8, (1991.) ,p.41- 80 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 慶應義塾における知的伝統 |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-19910000-0041 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

統計学―福澤諭吉から横山雅男へ

西川俊作

福澤諭吉が統計（事業）の「方面に着目し」、これに先鞭をつけたことは、石河幹明（みまら）がその『福澤諭吉伝』の第二巻末で触れている。ただし、そこでは統計が「保険と密接な関係のある」という観点から、福澤が阿部泰蔵をして明治生命を創めさせた経緯を記したあとに、付随的に言及されているにとどまる。

石河はまた、福澤「先生が」（つと）「夙に此方面に着目してゐられた」しるしとして『万国政表』（一八六〇）、および『掌中万国一覽』（一八七〇）の訳出を挙げている。さらに、製表社（のちに東京統計協会）を結成した慶應義塾の「スタチスチクの〔研究〕仲間」のリストを添え、政府に統計院を設けるよう、大隈重信に慫慂した福澤書翰（一八七九年一月三一日付、全集17、二四〇号書翰）を掲げているが、これらの点を最初に指摘したのは、呉文聡（くれあやとし）のあとを継いで慶應義塾大学（部）講師を永らく務めた横山雅男であった。

すなわち、かれは一九二五年『三田評論』誌のエッセイにおいて、Statisticsを「政表」と訳したのは『万国政表』が「最古」であること、また『掌中万国一覽』は「統計的に、欧米諸国を我国に広く紹介した」書物であることを述べ（傍点・西川）、ついで製表社・東京統計協会、および統計院の設置（一八八一年五月）、さらに明治生命

の創業に言及し、「慶應義塾出身者と我国統計事業」とは「頗る関係が厚いのである」と述べている。⁽²⁾

右のとおり横山が統計から保険へとという順で筆を選んでいるのはむろん、かれがその自称のとおり「統計家」、それも根っからの統計家であったためである。石河は時事新報において福澤の右腕ともいふべき存在であり、福澤没後は主筆となったけれども、統計のみならず他のいかなる分野の専門家でもなかったので、統計を「保険と密接な関係」にあるという視角、ただその角度から叙述したのもまた止むを得ないところであった。⁽³⁾が、その結果、他の分野、とくに社会・経済あるいは政治などの領域における、非商業的な論考において統計もしくは統計的方法が有用であることを福澤が示唆し（たとえば『文明論之概略』、『分権論』）、また現にそれを活用している（たとえば『時事小言』、『通貨論』）点に筆の及ばなかったのは残念である。その結果として、福澤の統計（学）発展への寄与は『万国政表』、『掌中万国一覽』の二冊に限られ、ただひたすら先駆的であったという点に絞られてしまったのである。

横山もこの点では同断で、のちに述べるのとおり、かれ自身は「統計上より観たる」都会と田舎、博士、また文芸家といったエッセイをものし、さらに選挙結果の統計的分析を試みているにもかかわらず、上記のような福澤の示唆や分析にはほとんど言及していない。だが、『三田評論』への寄稿に限って見ても、かれの統計学はとくに応用統計学において、福澤の遺鉢を継いでいると評しても良いところがある。

かれは広島県師範学校を卒えると「笈を東京に負ふ」て至り、共立統計学校で統計（学）を修^{うじ}じ、呉文聡に学んだひとで、一九一六（大正五）年、呉に代わって大学部統計学講師となるまでは慶應義塾とは縁もゆかりもなかった。これに対し呉は一八七〇（明治三）年中ごく短期間ではあるけれども、慶應義塾に在籍していた。それゆえ、慶應義塾における統計学の伝統という意味ではかれを欠くことはできないけれども、その生涯と業績につい

ては伝記や著作集がある⁽⁴⁾。ところが横山に関して、その伝記、業績を顧みたものは乏しい。これは単に慶應義塾のみならず、広く統計学界においても、とかくかれが呉の陰に隠れてしまっていたためであろう。

そこで、以下では呉については筆を省き、福澤から横山へという統計(学)における伝統につきトレースを試みることにしたい。横山は『文明論之概略』や『時事小言』、もしくはそれ以降の論説における福澤の統計的アプローチを見逃しているが、かれは少年の日に『窮理図解』や『世界国尽』、さらに『学問のすゝめ』を教科書として学んでおり、福澤流の発想や方法を身につけていたことは『三田評論』への寄稿に限っても、かなりの程度窺い知れるのである。

まずは、福澤の統計と統計学の理解と使い方から見てゆくことにしよう。これも汗牛充棟といわれる福澤研究のなかで、等閑視されていた部類に属する。横山については、そのあと、本稿後半において述べる。

一 福澤諭吉の「スタチスチク」

『文明論之概略』第四章の主題は「一国人民の智徳」である。

「文明は人の智徳の進歩」にはかならないと、福澤は言う。すなわち「文明は一人の身に就て論ず可らず、全国の有様に就て見る可きもの」である。では、一国あるいは「国の智徳」とはなにか。それは「國中一般に分賦せる智徳の全量」をいう。しかし、「人の心の働きは千緒万端」、たとい人ひとりについても、それを知るのは容易でない。まして全体の人心、また「其働は皆偶然に出て更に規則なきもの」のように見えるけれども、実は

決して然らず、文明を論ずる学者には自から此変化を察するの一法あり、この法に拠てこれを求れば、人心の働には

常に一定の規則あるのみならず、其定則の正しきこと実物の方円を見るが如く、版に押したる文字を読むが如く、これを誤解せんと欲するも誤解す可らず。蓋し其法とは何ぞや。(岩波文庫版、七一ページ)

大量観察の法、つまりは「スタチスチク」である、と福澤は述べている。

これがH・T・バックル『英国文明史』に由来することは、自他ともに認めるところである。⁽⁵⁾バックル(二八二—二六二)については、丸山真男『文明論之概略』を読む⁽⁶⁾(中の五ページ)に数行の紹介がある。そのあとバックルの克服しようとした既存の歴史観、すなわち自由意志論と予定説に関する、簡にして要を得た解説も与えられている。こうした史観または史論を批判するため、バックルは科学的な方法の一つとして統計にもとづく趨勢、または大勢の把握が必要であると主張したわけである。⁽⁷⁾

福澤の場合、相手とする旧史観はとうぜんバックルとは異って、大義名分論や英雄史観であったが、大量観察もしくは継続観測によれば、そこに必ず「規則」、つまりは統計的規則性が見いだされるのだから、「スタチスチク」は新しい文明史にとって有力な用具だ、と福澤も考えたのである。かれは年々の晴雨の日数を挙げ、その「前数十年と後数十年と……を比較しなば、前後必ず一様にして数日の差なきに至る可し」と述べ、「人心の働も亦斯の如し」と書いている。

ついでバックルの挙げてある英・仏の犯罪統計によって、殺人や自殺の年間発生件数が多少のぶれはあっても、平均を大きく離れることはないという点で規則的だ、と福澤は強調している。たとえば、ロンドンにおける一八四六—一五〇年の自殺は平均二四〇人で、最大値は四六年の二六六人、最小値は四九年の二一三人で——今日流にいえばこのレンジに——あったという事実を福澤はバックルから引用している。⁽⁸⁾

バックルはそのあと、力学の法則(力の合成)を例にして、それが様ざまな攪^{ディスターション}乱によって隠されうることを

述べているが、福澤はそうした確率的攪乱には眼が止まらなかつたのか、それとも「窮理学」の事例は先の年間晴雨日数の事例で十分と思つたのであろうか、かれ自身の着想による暑中日々の蒸菓子の需給バランスに筆を費し、それを「喰ふ人の心の働は一人に就て見る可らずと雖ども、〔東京〕市中の人心を一体にしてこれを察すれば、其これを喰ふ心の働には必ず定則ありて、明に其進退方向を見る可きなり」と書いている（岩波文庫版、七三ページ）。

続けて、かれは言う。

故に天下の形勢は一事一物に就て臆断す可きものに非ず。必ずしも広く事物の働を見て一般の実跡に顯はるゝ所を察し、此と彼とを比較するに非ざれば真の情実を明にするに足らず。／＼斯の如く広く實際に就て詮索するの法を、西洋の語にて「スタチスチク」と名く。此法は人間の事業を察して其利害得失を明にするため欠く可らざるものにて、近來西洋の学者は専ら此法を用ひて事物の探索に所得多しと云ふ。（岩波文庫版、七四ページ）

これはいわば中締めの記事で、社会現象における規則性が「スタチスチク」によって把えうる、と強調していることは誰の眼にも明らかである、原著を読み合わせてみれば、これはつぎのようなバックルの文章の「訳文」であることがわかる。

したがって、ある社会全体の徳行に規則性が存在するか否かを確かめることは至って大切なことなのであり、そして、まさしくそれこそ統計学がわれわれに提供してくれる貴重な資料によつて決められるはずの疑問の一つなのである。

（原著、一七ページ）

ただしバックルは、右の一般則、ないし結論的言明のあとに、犯罪統計、力学法則の攪乱、さらに結婚と穀価、宛先記入洩れ郵便数を「例」として挙げているのに対し、福澤は自在にバックルを活用し、叙述の順序を変更し、また事例を入れかえていたのである。福澤はバックルを「下敷」にしていた（丸山）と言われる所以である。

ロンドン、パリにおける宛先記入洩れ郵便数は、差出人の迂闊まがまがという人間錯誤ちがひの例として確率論の観点からすれば好個のものであるけれど、福澤はこれを割愛し、先の中締めめのとすぐに、結婚と穀価との逆相関の例を取り上げ、これまた自在にふくらませている。その自在さを知るために、まずバックルの叙述を見ておこう。それは左のとおり短い。

年々の結婚契約の件数でさえも、個々人の気質や望みによって決定されているのではなくて、個々人ではどうしようもない、大きく全般的な事由によって決められているのである。結婚と穀物の価格との関係は変わることなく、はつきりとしたものであることは、いまや周知のとおりで、イギリスにおける過去一世紀の経験に徴すれば、結婚は人の感情との関連をもつというより、人民大衆の平均収入ただそれのみによって規制されているのである。その結果、この果てしない社会的宗教的な〔結婚の〕習俗は、食物の価格と賃金率とによって揺れ動いているのみならず、完全にコントロールされているのだ。

二つの註のうち、*はこの関係がイギリスに限られず、フランスにも見られること、また「どの文明国にも」見られるにちがいないという、G・R・ポーターからの引用文から成り、また**は一八五〇、五一年における結婚届出数の急増が過去の平均所得を上回る所得増加にもとづくという報告の所在（『統計学雑誌』）を記したものである。前者は、福澤をして、

日本には未だ「スタチスチク」の表を作る者あらざれば之を知る可らずと雖ども、婚姻の数は必ず米麦の価に従ふこととなる可し。（岩波文庫版、七五ページ）

と言わたものであろう。福澤の筆は滑らかに走って、つぎの一文をもってこの段落を閉じている。

当人の心をも、父母の命をも、媒酌の言をも、「出雲」大社の神力をも、概してこれを制圧し、自由自在にこれを御して、或は縁談を整はしめ、或はこれを破れしむるものは、世間唯有力なる米の相場あるのみ。（同右）

これは原著本文の見事な「翻案」とでもいふべき文章であろう。

ただし、バックルは穀価のみならず、平均収入をも規定要因として考慮している。あるいは平均収入を穀価で除したところの、実質所得を考えているのに対し、福澤は「穀物の価貴ければ婚姻少く、其価下落すれば婚姻多く」といふふうに、穀価だけしか考慮に入れていない。その限りでいうと、平均収入の力を「読み落し」ているのである。もつとも、平均収入の上昇が小幅であれば、そしてそれは往時のイギリスはもとより、日本ではごくふつうの状態であったから、穀価のみを取り上げても、大きな誤りを犯すことにはならなかったことも確かである。

だが、かつて私の試算したところによると、人口一、〇〇〇人あたりの結婚数と米価との相関は、皮肉なことに、明治後半期（一八八三年以降）ではプラス（順相関）で、仮説に反する結果であるのに対し、人口一人あたりの所得が持続的に成長し、より高水準に達した大正、昭和戦前期に至ってむしろマイナス（逆相関）になり、ようやく福澤の予言・断言どおりとなっているのである。明治後半期の正相関は戸籍法、および統計制度の不備にもとづく、初期脱漏のせいである可能性が高い。それより、注意すべきは大正・昭和戦前期の（マイナスの）相関係数の数値で、その自乗——いわゆる決定係数——は〇・三程度にすぎないことで、平均所得をあわせ考慮すれば、これは〇・五あるいはそれ以上に達するであろうが、いずれにせよ福澤のいうように穀価によって、あるいはバックルの期待するように実質所得によって、結婚数の変化が完全に説明できるわけではない——そのとき相関係数は一・〇もしくはそれに限りなく近い値とならねばならない。バックルも福澤も、その「レトリックの力によって」統計的方法の有用性を読者に訴えるため、誇大な表現を辞さなかったのである。

『分権論』と『時事小言』は、それぞれ一八七七、八一年に書かれた政治論文である。前者は地方分権を論じ、後者はいわゆる「内安外競」論を説いたもので、福澤研究のみならず明治政治史、政治思想史上でも重要な位置を占める。それゆえ多くの研究者がこれに対して論評を加えているが、そこにさり気なく添えられているスタティッシュン福澤の示唆については、管見の限り、言及した論者はない。以下ではこれまで顧みられることになかったこの側面に光を当ててみたい。

まず『分権論』（全集4、選集5所収）。その付録冒頭にかかれ書いている。本文は

地方分権の大略を論じたるものなれども、分権の議論あれば分財の議論も亦なかる可らず。蓋し権と財とは大概其通行の路を共にして権の集る所には財も亦集り、権の分るゝ所には財も亦共に分るゝものなり。故に今別に一編の分財論を著して、始めて本編の意を全ふす可しと雖ども、理財の事を吟味するには、先づ統計表の詳なるものなかる可らず。即ち西洋に所謂「スタチスチック」是なり。

だが、そうした統計はまだない。旧幕時代にもそれはむろんなかったが、とりあえず当時の概数を用いて「国財分集吟味の趣向」を例示してみるならどうなるかを福澤は示している。天保二年（一八三一）の全国（含琉球）の総高三〇、五五八、九一七石余の「分財」は表1のとおりであった。

この概数は「世上の写本にあり」とかれは註記している。さらに「此高は所謂草高ならん」と言い、「草高にても実の數なれば吟味の證と為す可けれども、諸大名以下の領地に隠し高なるもの有て、其割合を知る可らず。此割合を探り出し、御料所〔天領〕の幾分を江戸に費し、幾分を地方に費したるや、万石以上〔大名領〕万石以下〔の旗本領〕の幾千万石は其内幾分を江戸に費し、幾分を地方に費したるや、都て其米は何れの路より何れの処に売り、其代金を何れの法に用ひたるや」——それを知る必要がある、というのである。

表1 1831年石高分布

| | |
|----------|------------|
| 皇室領 | 40,247石 |
| 徳川天領 | 4,191,123 |
| 諸大名領 | 22,499,497 |
| 寺社領 | 294,491 |
| 高家等 | 179,482 |
| 除地(万石以下) | 3,354,077 |
| 合計 | 30,553,917 |

つぎに「徳川の時代に通用金銀貨幣の全額は何程なりしや、諸藩の札は各何程にして理財上に何等の功用を為したるや、都会の町人の間に行はれし手形なるものは其性質如何ん」という問いを記している。福澤の関心は明治にあり、徳川時代はむろん脇筋ではあるが、ことマネー・フローに関する限り、政治秩序と違って旧時代のそれとは本質的区別の必要がないという考えから、こういう「趣向」を記したのであろう。

ところで、徳川時代の産出高や貨幣流通量に関する数量的情報を集め分析する試みは福澤以後ほとんどなされず、一世紀後の今日ようやく現われたことを考えれば、福澤の数量的発想がいかに先駆的なものであったか、多言を必要としないのである。もっとも現在、徳川時代といえはそれは「歴史」に属し、福澤の求めていたものは歴史統計であるため、それらを用いた分析は数量経済史ということになるが、福澤にとっては同時代の、『分権論』の時点からいえば、二、三〇年ほどまえの「オンリー・イエスタデー」のデータであった。

それにしても、金銀貨のみならず、藩札、さらには商人間の手形をも含め、それらを通貨とみなしうるか否か、という問題提起を行なっていることは、『文明論之概略』緒言にいうところの、一身二生・一人兩身を「僥幸」、
「好機會」とみなして「其前身前身に得たるものを以て之を今生今身に得たる西洋の文明に照らして、其形影の互に反射するを見」るという、かれの「経験」主義、そしてまた体験の表面をかい撫でするにとどまらず、ものごとの——ここでは貨幣流通の——本質に迫ってゆこうとする問題意識のあり方を良く示している。

以前、私はエコノミストとしての福澤を論じた際に、『通貨論』（一八七七、全集5、選集8）においてかれが目前の通貨残高を統計的に見積もり、それが過大か否かを吟味する過程で、中津藩における経験、とりわけ札遣いの実際を参酌している点を強調

表2 当面必要な「政表」

| | |
|-----|---|
| 1 | 中央政府歳入(6,800万円)の支出明細 |
| 2 | 税収の中央・地方配分割合の新旧比較 |
| 3+4 | 大名士族の支出は理財上無駄であったようだが、「財本融通」上の「便利」もあったのではないか。秩禄処分後その便利をどのようにして保つか |
| 5 | 税額の増減と必要・不必要な歳出との検討 |
| 6 | 紙幣流通高(9,400万円)に金銀貨を加えるといくらか。これより租税を引いたとき人民の手許にはいくら残るか* |
| 7 | 貿易の地方産業に及ぼす影響。国内金融と貿易との関連。 |

*この疑問は同義反復であり、また意義不明でもある。

したことがある。⁽¹⁾これはあきらかに『概略』、『分権論』において示唆的に述べられているところの、福澤の「方法」の具体的な应用到にほかならなかつたのである。

ふたたび『分権論』にもどれば、徳川期経済に関する以上二項のあとに続けて「国財分集吟味の趣向」としてかれの掲げている七項はむろん明治に関わるものである。表2はそれらの要約表である。

表の第三行以下は関連統計を整理しただけでは結論の下しがい必要策課題であるが、福澤はとにかくその際に抛り所となる統計が必要だと指摘しているわけで、かれが今日なら『世界各国統計表』とでも訳すところを『万国政表』と訳したのは、統計を政策課題の有力な判断材料とみていたからにはかならない。

『時事小言』(全集5、選集4所収)における統計の言及といえ、ひとは第四編「国権の事」における「西洋」列国と日本の人口・歳入と陸海軍費との比較表のことを思い浮かべるであろう。福澤は日本の軍備が貧弱であることを明示するために、該当統計を「利用」しているのである。それによると、

日本の人口は仏蘭西に同ふして、其歳入の高及び陸海軍の有様は十倍し、又日本と荷蘭とを比較すれば、我人口は荷蘭に十倍して、歳入以下の簡条は殆ど相同きを見る可し。(全集、一七五ページ)

したがって、「日本の十一人は仏、荷の一人に当ると云はざるを得ず」、日本人民の軍備負担は並はずれて少ないと、かれは書いている。ただし、この軍備負担過少論の当否を論ずるのは本稿の主題ではない。ここでは、統計が政

表3 ゴールトンの総括表^a

| | | % ^b | % ^c | % ^d |
|------|-------|----------------|----------------|----------------|
| 第一類 | 父 | 31 | 1 | 31 |
| | 兄弟 | 41 | 1.5 | 27 |
| | 息子 | 48 | 1 | 48 |
| 第二類 | 祖父 | 17 | 2 | 8 |
| | 伯叔父 | 18 | 4 | 5 |
| | 姪〔甥〕 | 22 | 4 | 5 |
| | 孫(男) | 14 | 2 | 7 |
| 第三類 | 曾祖父 | 3 | 4 | 1 |
| | 従祖父 | 5 | 8 | 1 |
| | 従兄弟 | 13 | 8 | 2 |
| | 姪〔甥〕孫 | 10 | 8 | 1 |
| | 曾孫(男) | 3 | 4 | 1 |
| 他〔の〕 | 遠族 | 31 | ... | ... |

註：a. Galton p. 317.

b. 300家に占める割合。

c. 有名人1人あたりの期待親族数。さらにくわしくは補論1を見よ

d. 該当人員に対する割合。父は1人ゆえ%は不変。祖父は2人ゆえ、 $17/2=8(\%)$

表として利用されていることに注意しておけば良い。
むしろ刮目すべきは、第六編「国民の気力を養ふ事」において福澤がF・ゴールトンの『能力遺伝論』(二八六九)を参看し、その結果を援用している点である。ゴールトン(一八二二—一九二一)は優生学の鼻祖として知られている。かれは天気図の作成、指紋学の確立、二人の人間の類似性や味・匂い等の「測定」といった分野で独創的な業績を挙げたが、従兄のチャールス・R・ダーウィンの進化論が現われるや、人間、とくに家系に見られる遺伝の影響に興味を抱き、各種の知的能力、ないし才能の遺伝に関する「統計的調査」を行ない、その結果を次々と公にした。福澤いうところの『能力遺伝論』はその第一作であった。⁽¹³⁾

福澤によると、ゴールトンはここで、

人生遺伝の能力を説かんが為めに、英国を本として
他国にも及ぼし、古今有名の人物を枚挙して、判事、
政治家、貴族、名将、文学士、詩人、理学士、音楽
士、画工、神学者、「カンブリチ」大学の卒業生、
競漕者、英国北方の相撲の十三門に分ち、凡そ三百
家族、九百七十七名の人物に就て其血統を調査した⁽¹⁴⁾
り…(下略)

表3はこの調査結果の総括表——ただし一部——である。⁽¹⁵⁾福澤はこの第一列を抜粋し、その諸数字(百分比)の意味するところをつぎのように解説している。
すなわち、

爰に有名の人物一百名を集めて、其父の智愚強弱如何を調査するときは、父にして有名なるもの三十一名あり、又其一百名に生れたる子にして四十八名は必ず有名の人物ある可き割合なり。第一類より第三類に至るまで、次第に血縁の遠ざかるに従て其数を減ずるを見る可し。(全集5、二二七ページ)

表の第二、三列を福澤は引用していないが、第二列は一人の著名人が持つであろう期待親族数、第三列はそのおのおのにおける「有名の人物」の出現確率である。ゴルトンは第二列を——サンプル・サイズの大きい——判事の平均値から得ているけれども、それを(かれ自身の表現によれば)「感覚的でエロティックな人種で、その生活はきわめて不規則である」詩人に対してもあてはめているのは、乱暴といおうか大胆といふべきか、首を傾げざるを得ないところである。福澤がこの点に留意したか否か、不明である。推測するに、不問のままであつたらしい。なぜなら、かれは父と期待値が一人である息子の場合の実際値(第一列)のみに——それは確率(第三列)に等しい——言及し、期待値が一人以上で、確率が実際値より低くなる兄弟、祖父等々の場合につき、具体的にはほとんど触れていないからである。⁽¹⁶⁾

それはさておき、「ガルトン」氏——と福澤は読んでいたのであるが——「同氏」の調査について、かれはこう書いている。

英国の人民に就き、其天賦の智愚強弱を十三等に分て、其第七等を平均の中等と為し、之より次第に上り、第一等第二等は即ち有名の人物にして、其数甚だ少なし。之を調査するに国民一百万人に付き第一等は十四名、第二等は二百三十三名の割合にして両様合すれば二百四十七名なり。即ち一百万に二百四十七は、四千人に付き一人の割合なり。故に今英国人民の一般に付て人物を求めば、四千人中僅に一人のみ。即ち四千人にして一人物を生むと云ふも可なり。然るに爰に血統を撰て有名の人物百人を集れば、必ず四十八名の人物を生むの割合にして、大数を比例すれば、一方

表4 天賦の才能の分布¹⁾
(100万人当たり人)

| 等級 | (1) ゴールトンの 14分類 | | (2) 福澤の考えに 沿った13分類 | |
|----|--------------------|-----------------------|-----------------------|--|
| | 平均 以下 | 平均 以上 | | |
| a | A | 256,791 | 147,892 ¹⁾ | |
| b | B | 162,279 ³⁾ | 224,760 | |
| c | C | 63,563 | 98,547 | |
| d | D | 15,696 | 24,882 | |
| e | E | 2,423 | 3,605 | |
| f | F | 233 | 299 | |
| g | G | 14 | 14 | |
| x | X ²⁾ | 1 | 1 | |
| 計 | | 501,000 ³⁾ | 500,000 | |

- 註：1) Galton, p. 34
 2) xはg級以下、またXはG級以上
 3) 正しくは161,279、計も正しくは50万。
 4) 中位階級の半数。この列については本文尾註(19)を見よ。

周知のように正規分布は平均値(または中位数)を挟んで左右対称の分布となる。したがって、分布人員はそのどちらか一方、ないし片側を示せば足りる。a、b、c、……各級は平均以下のもので、下へ進むほど天賦の才能が乏しくなる。逆にA、B、C、……各級はより豊かになる、と読む。いま問題なのは、天賦の才能の豊かなものであるから、福澤はG級を第一等、F級を第二等と「翻訳」し、その人員がそれぞれ一四名、二三三名、合計二四七名としたのである。ただし、読者のなかには、等級(数)のナンバリングが気になる向きがおられるであらう。

表4は原表の表側(等級)と、福澤の言及した数字(二〇〇万人当たり人員)第(1)列とを抜粋した表であるが、その意味するところは、つぎのとおり。

この文章の前段、「然るに」以前は、「ゴールトンの第三章「天賦の才能による人物の分類」の要約に当たたる表(原著、三四ページ)の、読み下しにほかならず、身長・胸囲のような身体的形質であれ、はたまた才能のような素質も、今日の統計学の用語でいうなら正規分布に従っているという、ゴールトンの主張をまとめて表現したものである。⁽¹⁷⁾

は四千と一として、一方は百と五十なるが故に、二千倍の差あるを見るべし。血統の大切な又疑を容るべからざるなり。(全集5、二二七ページ)

まず最初に、第一等はX級ではないのか、という疑問が浮かぶ。X級はG級以上の才能の持主であって（x級の場合はg級以下）、一〇〇万人につき一人しか存在しない。近似的にはまさしく（ともに）ゼロとみなして良いものである。⁽¹⁸⁾ 実際、ゴルトンもこれらを無視しており、しかもその断わりをなんら明示的に述べておらず、ただ表4にもそうしたとおりX、x行をG、g行から一行空けて印刷しているのみである。福澤はいうなれば直観的にそれを察して、等級からはずしたものらしい。

そこで、G級を第一等として以下順にナンバリングを施せば、Aは第七等、aは第八等で、g級は第一四等になるはずだが、福澤は全体を「十三等に分て」と書いているのはなぜか、というのが第二の疑問である。かれはAとaとを合わせて第七等とみなしたのちがいない。なぜなら、この両階級は平均値をもって境を接しているのであり、そこに属する人員は一〇〇万人中五十一万人余、まさしく過半を占める「平均人」（ケトレー）だからである。ただしゴルトンは、各等級を「等」間隔に刻んでいるから、福澤のようにAとaを合わせることにすると、この中位等級のみ「倍」間隔になって不揃いになってしまう。この点で福澤は誤っていたということになるが、しかしここで関心は第一第二等の「天才」にあり、（あえて言うなら）凡才、鈍才はどうでもよいのであって、福澤の誤りといってもそれは瑕疵^{ズキツ}でしかない。

ゴルトンは「ケトレーの表」——それは今日正規分布と呼ばれているものだ——に拠って表4を作成したのであるが、この表は分布の片側を等間隔で八〇もの区分に細分してある。ゴルトンはそれを一一区分ずつ括って一等級とし、順にA、B、C、……G（またはa、b、c、……g級と呼び、それ以上（または以下）をX（またはx）級としたのである。⁽¹⁹⁾ かれが「ケトレーの表」を集計するに際し一一区分ごととし、たとえば一〇、あるいは一二区分にしなかったのは、ルートトリッヂ社の名鑑『時の人』やタイムズ紙掲載死亡記事などによって、著名

人は当該の同時出生集団において四、〇〇〇分の一、あるいは一〇〇万人につき二五〇名前後だと見込みをつけていたからである。"ケトレーの表"の上端から二五区分(第八〇から五五)までの累積確率は〇・〇〇〇二四七二二になっている。これは一〇〇万倍すれば、二四七(名)に相当する。ゴールトンはそれこれ熟慮の上、表4第(1)列のような(片側)七等分を選んだにちがいない。

以上の段々、数字・記号混りで議論が細かくなった。少し論調を変えるところ。

原書のタイトルは直訳すれば、「遺伝的天才」または「天才の家系」である。⁽²⁰⁾「天才」とは、「うまれつきのすぐれた才能」であり、またそれをもつ人である(広辞苑)。しかし、本書においてゴールトンがいう著名人とは、右の意味での天賦の才能に恵まれた人というだけではない。たとえば出自が卑しく、教育が不十分であり、また貧困や偏見、その他多くの障害に出会いながらも、それらを克服して、自らの天賦の才能を発揮し、世人によって広く認められたものをいう。したがって、溢れるばかりの天賦の才能を持っていると見られるものの、不幸にして夭折した人物は、よしんばその夭折によって有名であったとしても、「有名の人物」(福澤訳)とはみなされない。これは片手落ちの定義と見えるが、そうではない。天賦の才能に恵まれているかどうか、幼年・青少年の時代には明らかではないからだ。幼時神童と謳われた人が長じて凡人として終った、というケースは珍しいものではない。

一方、著名人伝においてその主人公が神童であったというエピソードがしばしば記されている。と同時に、かれが数々の不幸や困難に打ち克った事実が述べられている。それらが凡人ではとうてい克服できないようなものであるにもかかわらず、それにめげず自らの天賦の才能を発揮して、官位や門閥といった表面上の名声は別にし、高い世評を受けるに至った人をゴールトンは著名人と呼ぶ。ルートリッチ社名鑑等によれば、その意味での

著名人は五〇歳代、もしくはそれ以上であり、かれらが五〇歳以上人口に占める割合は一〇〇万人に一人、ないしは四、〇〇〇分の一であった、とゴールトンは書いている。そのなかには自己発現の障害など云々せずとも、世人が「天才」と認めるものもむろん含まれる。しかし「天才」は努力型がふつうで、無努力型などありえない、とゴールトンは考えていたのである。

もっとも、天才あるいは著名人のなかにもグレイドのちがいはあって、「抜群の天才」、「高度に著名な」人びと、そして「平均能力」が（前者とは）「同級ではない」人びとがある、とゴールトンは述べている。⁽²¹⁾

このような定義にもとづいて、諸分野・諸国の著名人を選び、その伝記・家系資料に当たった上でかれは、福澤が引用したとおりの結果を得たわけだが、その結果の「客観性」^{インシューブヤクテイ}を吟味してみたいと思う読者は、どの職業であれ、またどこの国についてであれ、もっとも著名な人一ダースを選んでゴールトンと同様の調査をやってみれば、「遺伝の性質に関する私の見方が、私をして期待せしめた」とおり「顕著な関係」を見いだせるであろうと、その序論（第一章）をしめくくっている。

ここでもしろいのは、福澤がW・ピット（第七章政治家）、T・B・マコーレイ（第一〇章文筆家）の一族における著名人名を列挙したのち、つぎのように記していることである。

読者は「ガルトン」氏の所説を見て如何なる観を為すや。若し此に疑あらば各自の実験を以て之を質す可し。必ず大に発明することある可し。余は弱冠の時より処々の学塾に遊び、同窓友人の内に俊英の才子あれば、機に投じ事に托して直接又間接に其父母祖先の人物如何を問糺すこと恰も一種の癖と為りて、竊に之を心に記すこと久し。読者も或は偶然に同様の事あらん。若しも其事なくば、試に今日誰れ彼れを問はず、一、二有名の人物に就て其血統を糺す可し。必ず遺伝相応の実あらざるはなし。曾祖父母以降内外の親戚に傑出の者なくして、偶然に人物を生ずるは極めて稀有の事なり。益^{トク}以て氏の説を信ぜざるを得ざるなり。（全集5、二二八―九ページ。ふりがな・西川）

しかしながら、「この能力遺伝の主義」は傑出の「曾祖父母」はそれに先立つ祖先からの遺伝によって生じたのか、それとも偶然であるのかという疑問に答えるものではない。当の著名人の能力の後裔たちへの遺伝の可能性はかなり急速に減衰していることからして（福澤の引用している総括表を見よ）、偶然の働きのほうが強いのではないかとも思われる。また、福澤の「実験」は若い、「才子」たちの「曾祖父母」のみに関わるもので、かれら才子たち自身、はたまたその子弟が著名人たりうるほどの業績をあげたかどうか問うていないのであり、ゴルトンよりせまい方法と言わねばならない。また福澤は、士族における「天賦」の「智徳の資」とともに、二六〇年の伝統をもつ士族の「家風」、なかんずくそのピューリタニズムを重視しているのであり、それは遺伝よりはむしろ家庭での躾もしくは教育によって培われるところが少なくない。したがって福澤はゴルトンの所説を拡大解釈していることになるが（この点についてはさらに補論2で触れる）、しかし「実験」の精神と統計（学）的方法に關して福澤がゴルトンに深く共鳴するところがあつたことは、その「一種の癖」によって裏付けられている。

二 統計家・横山雅男

横山雅男は統計学者というより、その自称のとおり統計家というのが確かにふさわしい。あるいは多智智家とするのが、より適切なものかもしれない。「多智智」はかれの師である杉亨二（こうじ）の造字であり、「スタチスチク」と読む。政表（福澤論吉）、会计学（神田孝平）、表紀（津田真道）、形勢学（杉亨二）、統計学または国勢学（眞作麟符）、そのいずれにも満足し得なかつた杉苦肉の造字である。かれとその一統は右の諸語のうち「統計学」をもっとも不適當なものとみなしていた。和漢の用例によると統計は「合計」、「総計」と同義であつて、滝沢馬琴はこれを

「つごう」と訓じていたという。⁽²³⁾一八七六年、杉の創めた(統計)学社はそれゆえスタチスチック社と称していた。またかれを「教授長」とする共立統計学校(一八八三―八六)では終始、**侈智契**(もしくは**侈射契**)が用いられた、と横山は述べている。⁽²⁴⁾

その後明治二〇年代を通じて「スタティスティック(ス)」の訳語を巡って、もつと正確にはその性格づけを巡って、森林太郎や藤沢利喜太郎たちと、杉とその一統のあいだで論争があったことを知るひとは多い。横山も藤沢に対する批判論文をものしている。⁽²⁵⁾だが、「スタチスチック」にせよ、また「侈智契」にせよ、鬼面人を驚かせる嫌いもあり、一八九二年一月からは機関誌『スタチスチック雑誌』を「杉先生の同意を得て『統計学雑誌』と改称し」、同社もまた統計学社と名乗りを改めたのである。⁽²⁶⁾世俗に準じ、汎用、通俗を旨としたのであろう。稀代の統計(学)の啓蒙家であった横山は**侈智契**家より統計家であり、と考えるに至ったのである。

横山雅男の学歴・職歴 その生年は一八六四(元治元)年と推定される。⁽²⁷⁾すでに本稿冒頭で触れたように、かれが「笈を東京に負ふたのは明治十五年の初春であった」というから、それは横山一七歳の初春のことであった。⁽²⁸⁾旅装を解いたのち「暫くの間は神田猿楽町の明倫舎より毎日弁当を携へて東京書籍館(今の上野公園内の帝国図書館の前身)へ通って朝から夕まで熱心に種々様々の書籍を閲覧したが、その中に偶然にも**箕作麟祥**訳の『統計学』や津田真道訳の『表記提綱』や堀越愛国訳の『国民統計学』などもあったので、田舎出の私としては比較的早くヨーロッパに統計学のあることを知ったのである」と、横山は回想している。

しかし、このあとすぐに統計学に向ったわけではなく、まず「三島中洲先生の二松学舎に贅を執った〔入門した〕」のち、いったん司法省速成法学生に応募をすすめられ、願書を出したものの、新聞で新設の共立統計学校

の募集広告を見たので、「此の珍らしい学問を学びたく心が動いた」から、「司法省の方を止めて統計学校へ志願した。幸に入学試験が通ったので、明治十六年（一八八三）九月十六日より同十九年の春まで蛭雪の業を励んだのである」履歴書の流儀によるなら、この共立統計学校がかれの最終学歴であった。

同校は、横山の別稿によれば、太政官統計院々長鳥尾小弥太、幹事安川繁成の発起（一八八二年八月）で企てられた統計講習所を「拡張して」できたものであり、「設置同志者」、すなわち資金の拠出者（八四名）のなかには「岩崎弥太郎、渋沢栄一、三井八郎右衛門、益田孝、広瀬宰平」等、財界のリーダーの名もあった。「明治十六年六月下旬諸新聞に広告して志願者を募集し七月十一日から十四日まで四日間入学試験を行ふた」という。試験科目は地理、歴史、物理、論理学、経済学、数学、仏語、独語の八科目であった。「試験に及第した者は三十一名でしたが、其後臨時入学試験を受けて及第した者や聴講生といふ資格で通学した者も尠なくありませんでした。速記家の若林珣蔵君なども一時通学したものです」。

その教科書はハウスホウファの『移智契』（註24参照）によって「統計の歴史及理論、人口統計、生命統計、経済統計、社会及政治統計、道德統計と定められたが、此外万国統計会議の決議条項殊に人口統計論はハウスホーヘル著書以外ワッペウスの人口統計論（しんか）而も大部分（たぶん）な原著から「杉亨二先生が」講義されました」。

その「第一回卒業生は三十六名、卒業の資格がなくて単に修学証書を受けたものが九名で、明治十九年（一八八六）二月十一日の郵便報知新聞に統計学校卒業生徒広告と題して前の四十五名の原籍氏名を掲げ、右の者統計事務に採用相成度向は本校に於て推薦紹介す可し麴町区飯田町一丁目靖国神社付属地内共立統計学校と掲げられました」と、横山は語っている。³⁰かれ自身は、京橋区内に新設された実地商業夜学校の講師（統計大意）を振り出しに、専修学校（専修大学の前身）、大日本私立衛生会（会頭は長与専斎・北里柴三郎の時代、のち日本衛生会）、日本大

学などで統計の講師を務めた。つづいて「特筆すべきもの」(?)は、とかれは言う、「陸軍大学校(明治三十三年より大正九年まで)及慶應大学(明治三三、四年及び大正五年より昭和七年まで)で、共に二十年近くも統計を講じたことである」と。

慶應義塾大学の発足は一八九〇(明治二三)年一月末で、統計学は理財科の場合、第三学年配当ゆえ、九二年に開講され、はじめP・マイエットが担当し、ついで岡松径が、そして一八九八(明治三二)年より吳文聡が担当した。³¹⁾ 吳の講義は一九一五(大正四)年までで、そのあとを横山が継いだわけである。ただし、一九〇〇、一九〇一(明治三三、三四)の二年間は、吳の欧米出張(一九〇〇年五月―十二月)のため、横山が代講した。そして、一九一六(大正五)年からの交代は吳の高齡(この年かれ六五歳、横山は四二歳)と、健康上の理由(五年まえより脳溢血症)によるものであった。³²⁾

横山の統計学——その(慶應における)講義の内容を『統計学』によって見てみると、つぎのようになっている。³³⁾

緒論

第一編 統計汎論

第二編 統計の理論

第三編 統計の方法

第四編 統計の技術

第五編 統計の機関及行政

統計各論

第一編 人口統計論

右の「緒論」において、「汎論」のなかには内外統計史、統計の理論・方法・技術と、機関及行政という項目が並べられている。そして実際、緒論第一編統計汎論は「第一章内外統計史」を含むだけで、他に汎論または総論らしきものはない。ここは第一編内外統計史とし、右肩に統計汎論と記せば、構成は整ったものになるが、著者はそれを省いたのであろう。

また、おなじく「緒論」によれば、「各論」は人口統計のほか、経済・政治・社会・倫理・教化統計の各分野から成るとされているが、週一回（六〇分）あての講義では人口統計以外の分野に及ぶことはできなかったと見てよい。「第一編 人口統計論」のみで終っている。⁽³⁴⁾

この人口統計論は、甲乙丙の三つに分けられ、「人口の静態」、「人口の動態」、および「生命統計」（今日流にいはば生命表）を論じている。静態人口論の中心はむろん国勢調査で、その前史、調査の課題・方法等、ならびに調査結果を述べている。ただし、日本の一九二〇年、第一回調査の「製表」は未了につき、ここ（「統計学」では、「各国における最近の統計に拠って」、人口総数・密度・集中（「占居」）、性別・年齢別・職業別構成、配偶・世帯人員などが概観されているにすぎない。日本について、その結果公表後はむろん、国調の数字が参照されたことであろう。⁽³⁵⁾

かれの静態人口論で異色というべきは、日韓中三国の、今様にいえば歴史人口（または戸口）を集めていることである。⁽³⁶⁾ただし、それは眼に触れたものを網羅的に集めたという体のシリーズを成しているにすぎず、たとえばわが国一八、九世紀の（幕府）子午調査人口について、脱漏の少なくないことを力説するばかりで、わずかに国（分）別人口——一七五〇（寛延三）年、一七五六（宝暦六）年、一八〇四（文化三）年、一八五二（嘉永五）年の四

か年分——において、数字を欠く一七五六年の豊前・肥後両国の人口を補い、四年度間の人口増減数を示しているが、この増減の原因等につきなんのコメントもない。(韓中についても同様であった) したがって聴講生からすれば、それは好事家のペダントリとも見え、江戸時代後半期における人口停滞と、明治時代における着実な人口成長との対比による問題発見、さらにマルサス理論の経験的吟味といった民勢学的な研究へと、学生をいざなうことはなかったのである。この点では初代の理財科主任教師G・ドロップス(在任期間一八九〇—一九八)が「徳川期における日本の人口」において、マルサス理論を用いてこの間の人口「停滞」を説明したのにくらべ、一歩あるいは数歩及ばないのである。³⁷⁾

横山の講義は学部スタッフにとっても満足のゆくものではなかったらしく、かれ自身の高齢(一九三二年には六八歳、また後任(寺尾琢磨)の出現もあって、一九三一(昭和六)年度をもって終止符を打ったのである。(先の引用で「昭和七年まで」と書いているのは、暦年であろう)。その不満とは、たとえば、つぎのようなものであった、と聞いている。左は『統計学』(汎論)第二編第五章大数の法則の書き出しである。(四三ページ)

一掬ひの水には何等の色がないやうであるが、大海深淵は碧色である。又少量の気は毫も色が見えない。併し天を仰ぎ見れば実に蒼々として居る。人間社会の現象も少数観察の場合には何等規則の事が見えないけれども、それが段々と数が殖えて五千は一万となり、一万は五万となり十万となり百万となると、其中に段々規則的の事が明白に知れます。これが即ち大数の法則である。(四三ページ。句読点・西川)

冒頭の水と空気、または大海深淵と大気の例はかれお気に入りのものであったらしいが、適切なアナロジーとはいかにも言いがたい。

以上のような次第にもかかわらず、横山が福澤のスタチスチックスの後継者である、と私が言うのは以下のような理由からである。『統計学』における横山自身の用語を使えば、「統計の理論」、「方法」の面で、かれが継承したのはハウスホッフ／杉のそれであって、福澤のスタチスチックスのすべてではなかった。また、福澤は統計の理論・方法の分野ではなにも残さなかった。かれが示唆したのは結婚と米価の「定則」といった天下の大勢、また能力の遺伝を探るための統計データの整備であり、それらを用いて「事物」を明らかにしようという実証的方法であった。強いていうなら、それは応用統計(学)であった。ところが横山が継承したのはまさにそのような応用統計、ないしは(社会科学の諸分野における)実証的経験的アプローチなのであった。

人口統計論 『統計学』の各論では人口統計論が扱われているにすぎないことはすでに述べた。(第一回) 国勢調査の集計が終っていなかったこともあって、その静態人口論は中途半端であったけれども、動態人口論においては結婚・出生・死亡、そして(外国への)移住などが利用可能な、明治・大正期ならびに海外データにもとづいて論じられている。ただし結婚と穀価の逆相関々係につき、明示的な論議はない。横山は言う。

婚姻は人口動態の基礎で、且人間繁殖の根元である。古人が君子之道造端乎夫婦」と云ったのも実に至言である。抑も婚姻は世の中が不景気、日用品の高価、戦争、伝染病の流行、飢饉等の如き消極的事件の発生した場合にはその数が減少し、これに反して積極的事件〔好況か?〕のある時には婚姻数は増加するものである。(三〇六ページ。句読点、傍点・西川)

これは婚姻の章の書出しであるが、この章(五・五ページほど)を横山はつぎの一文で結んでいる。すなわち、婚姻数は社会のバロメーターであるから、深くその原因結果の関係などに意を払って研究せんことを聡慧なる統計学

者、社会学者、経済学者等に望むのである。(三一—一ページ、句読点、傍点・西川)

傍点部分から察しがつくように、横山は『文明論之概略』を通じてではなかったらしいけれども、結婚と穀価との逆相関々係を弁えていたことは疑いない。だが、かれは終始、統計学の領域を守り、その埒外には出ることがなかった。言いかえるなら、横山の統計学は統計の蒐集、製表、考察といったことに専念するものであり、結婚と穀価(とくに米価)との相関を見ることは「社会学者、経済学者」にこれを委ねていたのである。

しかし、この両者に先立って「統計学者」に対してもかれは望みを託している。それは後進の統計学者であったのかもしれない。後進のものであれば、とりあえず両系列の散布図(もしくは相関図)を描き、さらに相関係数を求めたであろう。相関・回帰分析は、ほかならぬゴールトンの着想に端を発し、K・ピアソン(ロンドン大学、ゴールトン記念講座初代教授)によって定式化された⁽³⁸⁾。ことによると横山はピアソンの仕事の中間報告を耳にしていたかとも考えられるが、しかし横山の統計分析の工具箱に相関係数も回帰直線もまだ調えられてはいなかったのだ。実際、それが慶應大学の統計学講義に「導入」されたのは、後任の寺尾琢磨によってであった⁽³⁹⁾。

他の応用統計 これらについては、講義配当時間の都合もあって、『統計学』の各論では割愛を余儀なくされたところであろうが、『三田評論』誌への横山の寄稿のなかにはその欠を補うものが少なくなかった。それらを列記してみよう。(ただし国調、人口統計に関する論説は除く)

- 1 統計上より見たる都会と田舎(一九〇三・九)
- 2 戦争と統計(一九〇四・三)
- 3 衆議院の統計的分析(一九〇四・五)

- 4 統計上より観たる博士（一九〇五・二）
- 5 統計上より見たる現代文芸家（一九二〇・三）
- 6 統計上より見たる臨時総選挙（一）—（三）（一九二七・六、八、一一）
- 7 本邦機械工業統計一斑（一九一七・一二）
- 8 我国農事統計の一瞥（一九二七・四）
- 9 失業統計概説（一九二七・六）
- 10 我国電気事業概況（一九二七・九）
- 11 総選挙の回顧（一九二八・三）
- 12 最初の普選の決算（一）—（三）（一九二八・四、五、六）
- 13 第二次普選の回顧（一九三〇・四）

ここで1〜5は、呉の在任期間中の寄稿で、2、4は「散録」と呼ばれており、1、5ともども、いずれも短いエッセイであって、いわゆる埋草に近い。一九〇〇、一九〇一年に呉の代講をつとめたことで、『三田評論』編集者と知りあい、執筆を依頼されたのであろう。⁴⁰したがって、割愛した「各論」の補いになるのは6以下の諸篇がそれに当たるわけで、これらは大別すれば経済（産業）統計と、政治（選挙）統計といふことになる。

前者、すなわち7、8、9、10の各篇は産業および労働（失業）の諸調査が実施され、その結果が公になるにつれて、それらの結果を概説したものであって、それなりに興味がないわけではないが、3に始まり6、11、12、および13へと続く一連の選挙結果分析は、今日いうところの計量政治学の先駆ともいえるべく、私たちの関心をそ

その。つぎにそれらをややくわしく見ておきたい。

論文3は「衆議院の統計的分析」というタイトルを与えられているけれども、一九〇四年三月一日の第九回総選挙によって選出された衆議院議員について、府県ごとにその①党派、②職業、③年齢および誕生年代、④族籍、⑤位階、⑥勲章、⑦学位別に集計し、その相対比（パーセンテージ）を計算したものである。（ただし⑦は法学博士号を持つもの三名を数えるにすぎず、よって府県別との二重分類表は掲げられていない）

したがって、今日の感覚からすれば統計学的分析というには素朴極まりないものであるけれども、あえていうなら手集計により、二重分類表とはいえ、衆議院議員三七九名の属性を統計的に把握しようとした努力は評価に値する。

この論文の冒頭にかればこう書いている。

本邦有史以来絶無の時局に際し而かも宇内列国凝視の間に和衷協賛の任を竭くしたる第二十回帝國議会の衆議院は如何なる素質より成りしや。之を統計上より分析して世上に示すは余輩統計家の責任なりと信す。⁽⁴¹⁾

つぎの論文6は一九一七年四月二〇日の第一三回総選挙の結果を「統計上より少しく観察」したものであって、横山とすれば右と同じ考えから筆を執ったものにもちがいない。前稿から数えると、一三年の間隔があり、この間には三回の選挙があったものの、それらに関する論文の寄稿はない。⁽⁴¹⁾あるいは他誌に、三回すべてではないにしても、その結果分析を寄稿している可能性がないわけではないが、『三田評論』への寄稿を軸にして横山の業績を顧みるという本稿の建前に従ってなお博搜を怠っていることに読者の寛恕が得られるものとして、とりあえずこの久しぶりの論文6は「統計上より見たる」という、以前と同様の限定を付してはいるものの、論文3にくら

べるなら、左のような経験的傾向を見出し、問題点を指摘している点で、一步の前進を見せている。すなわち、

- (1) 憲政の幼稚なる我が邦に於ては政治上の進退必ずしも政見若しは主義に因らざるを以て政党の離合定りなく政派の去就常なく、加ふるに総選挙も二、三の異動ありしが故に、的確の批判を下し難しと雖、「あえて分析して見たところによれば」之を要するに我が邦政党派の消長は選挙の際野にあるものが常に勢力を失墜せることなり。
- (2) 云ふまでもなく、都市は進歩的にして、村落は保守的なるがゆゑに、郡部選出議員に老人多く都市選出議員に新進気鋭の壮年者多かるべきに、事實は全く反せり。是れ我が邦都鄙に於ける政治上の自然的趨勢か、抑も亦不自然なる理由の下に斯る変象を現はせしか、識者の研究を要す。

論文11「総選挙の回顧」は、続く12の主題「最初の普選」（一九二八年二月二〇日、第一六回）に前もって認められたもので、それ以前の一五回の総選挙ごとに、議員定数、有権者数、およびそれらの対人口比（第一表、投票数、棄権率、当選者平均得票数（第二表）を掲げ、①再三の衆院選挙、②小党派の分立（各党派別の当選人員、当選率は書き下し文で与えられている）を各め、「政治的良心」にもとづく「選挙の自由と投票の神聖」、ならびに「選挙費用の制限」を論じた、好論である。これらは目新しいとか、また傑出した意見というわけではないが、適度の統計的事実を添えた客観的議論と評することができる。普選を前にして過去の選挙を総括したものであった。

論文12はそのタイトルどおり、最初の普選の「決算」を試みた長篇であつて、三か月、あるいは三号にわたつて連載されている。その一は刊行月（四月）から見て、選挙結果が明らかになつた直後に認められたと覚しく、投票率（八〇・三％）のほか、府県ごとに新旧の議員数を掲げ、かつ党派別にその予想と結果とを比較しているところが新味である。論文の後半は「当選確実を予想されたもので落選したもの」、または「当落の境に立つてゐた中で落選したもの」のリストであるが、ベタ書きで、府県と党派が添えられているものの、なんらの分類も集

計もなされていない。皮肉をいうなら、この条は統計家らしくない。

これに反し、その二では統計家らしく、内務省統計により府県別の有権者・投票者・棄権者数、郡部・市部別の棄権率（二八・五対二〇・五%）、立候補者・当選者数（政友・民政の二党派別になっている）を引用している。だが著者コメントはない。

その三はいくつかの興味あるコメントを含み、さらにはロンドン、ニューヨーク・タイムズ、支那新聞などの論評も引用している。統計表としては、府県別に当選者の年齢階層別（二〇・五歳きざみ）、職業別、学歴別分類表が収められている。それぞれ既往（第七回）以降との全国計の比較表も与えられている。

まず年齢について、横山は言う。「衆議院の中心点は大体に於て四十五歳乃至四十九歳に在りといひ得る」と。また「普選で年若い新人を期待されたが開票の結果は変り榮（さか）えせないで普選の初生児は多く禿頭霜鬚の奇観を呈した」と。第七回以降二六年間の推移を見れば三九歳以下が一〇〇人から三五人へ、逆に五五歳以上が四六人から一五五人へと傾向的に変化しており、当選者の高齢化は明白である。衆院議員の「中心点」は一九〇二（明治三五）年当時、四〇歳代（二八九人）であったが、一九二八（昭和三年）普選では四五―五四歳層に移った（二九八人）というのが、統計学的にはより良いステイメントであろう。

職業、学歴は相い関連しているところがあるけれども、まず前者につき横山はこの普選において「現官吏が三十九人、元官吏が三十二人」と多いことに留意し、それは「暗に朝野両党が極力選挙を競争した証拠を示めすものゝ如くである」と論じている。一方、学歴に関しては、学歴不詳一割二分、小学校卒四分七厘（合計一割七分弱）もあって、政府予算書を「真に読み得ることは難しい」ようだ、と危惧している。続けて、学歴はさておくとしても「況して我国民は伝統的に数学觀念が概して欧米文明国民より劣つてゐることは否定し能はざる所であ

る」とも書いている⁽⁴²⁾。

以上のほか、その三には①買収、②選挙費用、③供託金といったかねにまつわる問題、さらに④実業家、しと繙徒（仏僧）の立候補・当選者、⑤婦人の応援演説、⑥選挙に投入されたマン・アワーの推計（およそ二〇年弱——ただし横山によるものでなく、「某好事家」によるもの）、⑦「合流」、「缶詰・缶切」といった新語の流行にまで及び、横山なりの「決算」としている。

論文13「第二次普選の回顧」は一、はしがき、二、総選挙の「回」数、三、選挙権者の数、四、候補者の数、五、選挙の心得、六、「各紙」共同宣言、七、選挙標語、八、公認及非公認、九、候補者年齢を論じているが、統篇のない未完のエッセイで、とくに紹介するほどの新味はない。退任まで年余を残し、かつ健筆家の横山にしては珍しい中断である。なにゆえの「未完」か、その事情は審らかではない⁽⁴³⁾。

福澤への回帰と継承 横山が福澤のスタチスチックスについて考え始めたのは、郷里の先輩杉山新十郎より見せられた「福澤先生の珍しき芳翰」に端を発したものらしい。それはいま『全集』第一七卷（書翰集の一）に、九〇、九五号書翰として収められているもので、備後福山藩の（小）学校教科書を福澤および慶應義塾社中の著書に拠ることとするという、同藩大参事岡田吉頭の提案に⁽⁴⁴⁾応じて、その実施方法に⁽⁴⁴⁾関し福澤の考えを述べた手紙であり、同県学校掛り（明治四年一月より一〇月まで）の杉山宛であった。その本文は九五号書翰で、日付けは明治五年二月である。九〇号書翰はその追伸、もしくは同封別紙というべきもので、『世界国尺』（一八七〇年刊、全集2所収）の記述中杉山の気付いた誤り、不審六点に対する、福澤の返答から成っている。その末尾には、朱書にて、

国づくし唯今再刻出来次第一部さし上可申、御心付の段不知所謝、難有奉存候

と記されていた。全集編集者は『世界国尽』の再刻再版が明治四年一二月であったことから、この別紙を——實際に別紙になっていたものか(?)——明治四年のものと推定しているが、横山は一九七四(明治七)年一月一日の福澤先生誕生記念会の記念講演では、本文、つまり九五号書翰の日付(ただ二月とあるのみ)と署名のあとに「○」が書かれ、そのあとに追伸(ないし別紙、つまり九〇号書翰)が続いていた、と語っている⁽⁴⁵⁾。

それはさておき、この書翰を紹介するに先立ち、横山は

此の手紙の中には私の年少の頃、世界は広し、万国はおほしといへど大凡、五に分けし名目は、⁽⁴⁶⁾ 亜細亜、亞弗利加云々と、小学校で声高らかに暗誦してお互に勝敗を争ったことのある有名な世界国尽に関係してある

ところがあるので、これを「ひき写しにして貰った」と述べている。

さらに『三田評論』上の別稿によると、横山は広島県賀茂郡の小学校——校舎は大伽藍国分寺で、首席教師は旧芸藩々儒種野友直——において『世界国尽』、『学問のすゝめ』、『窮理図解』、『董蒙教草』、『啓蒙手習之文』、小幡篤次郎『天変地異』、古川正雄(岡本周吉・節蔵)『智慧の環』などを学んだ、と回想している⁽⁴⁶⁾。これは岡田・杉山などによる福山藩(県)下の小学校に慶應義塾出版の著訳書を用いるという方針が実施されたこと、なにより証拠と言って良い。横山もその級友も福澤本によって学問の手ほどきを受けたのである。

横山の場合福澤への回帰は、小学読本の著者に対する懐旧の情にだけ根ざしていたわけではない。前引の誕生記念会講演の冒頭において、その統計学の「恩師法学博士杉亨二先生」が福澤とおなじく適塾に学んだことがあり(二八四九、嘉永二年四月三日入門、程なく帰郷⁽⁴⁷⁾)、また杉・福澤は明六社などで「一緒にお働きになったのであるから御交際のあったことは勿論で」、杉門下の自分が福澤の誕生記念日にその「珍らしい御手紙を御紹介致しますの

も誠にくしき因縁と存じます」と、切り出してゐる。杉による統計学事始めへの想いも横山にはあったに相違ない。それゆえに、すでに本稿序説にも記したように、横山はのちに「統計書」(尾佐竹猛) 翻訳の嚆矢である『万国政表』、さらにその掌中版である『掌中万国一覽』(全集2所収)を「統計的に欧米諸国を我国に広く紹介したもの、と評価しえたのである。⁽⁴⁸⁾

この小冊子はふつう、実用的な地理書とみなされており、夥しい福澤研究のなかでもこれをまともに論評したものは乏しい。それは、同書凡例に「此書〔下記の諸著の〕抄訳に係ると雖ども、書中毫も私意を交へず」とあるためか、とも思われるし、また、

地球五大洲の分別／大洋の深淺大山の高低／世界中の人口／人種の論／蛮野文明の別／各国の言語／欧羅巴三帝十五王／欧羅巴五大国並亜米利加合衆国／西洋各国鉄道の長さ／各国に金銀銅鉄を産する多寡／世界大都會の経緯度(全集③、四五六一五七ページ)

といった内容のものだからであろう。

しかし、人口、面積・領域等々の数字は「皆千八百六十六、七年以来開版の原本に就て萃^{すま}を抜したるもの」であり、『万国政表』の原本——実は表であるが——は一八五四年の刊行であったから、所収数字は『掌中万国一覽』においてより後年の、より正確なものに更^{リニューン}新されているのである。⁽⁴⁹⁾横山がこの小冊子を統計書に数えたのは、そのような福澤の数量的アプローチをよく理解できたからであるにちがいない。

こうして見ると、大正なかばから昭和のはじめにかけて横山が記した福澤への回帰は、回帰などというよりむしろ遺産の発見、ないしは知的伝統の継承であった、というのがいっそう適切なようである。ただし、それは明らかに「政表」としての統計学に限られ、寺尾琢磨の用語でいえば、「Statistik」としての「統計学」であり、「Stochnastik

としての統計学」に「転化」しうる可能性は横山の場合、閉ざされていた。⁽⁵⁰⁾

しかし、一九三一年春に設立された日本統計学会にだけは慶應義塾大学所属のメンバーとして名を連ねたのである(同会『年報』第一年〔一九三二・三・一〇〕)

補論1 ゴールトンの期待親族数

ゴールトンが(英国)判事の調査から、期待親族数(本文表3の第二列)を得たことは本文(五一ページ)に述べた——そのことは原著、八一—八三ページに記されている。ここで疑問なのは、かれら(著名)判事の成人した兄弟数が(男女それぞれ)二・五人平均であるのに、その息子は一人平均となっている点である。(娘の数をゴールトンは与えていない)表3で兄弟数が一・五人となっているのは、当の判事本人を除いたからであるが、かれの息子の数が一人平均というのは解せない。これは二・五人とおくのが、至当ではないか。

ここで対象となった(著名)判事は、一六六〇年から一八六五年まで、二〇五年間における二八六人で、かれらの家族、あるいは両親は息子二・五人、娘二・五人をもっていたというのであれば、その息子たちも平均すれば二・五人の息子と、おなじ数の娘を持つと期待して然るべきであろう。一人息子というのは「判事」の父親の場合だ、とゴールトンは言っている。たしかに、判事の父のすべてが判事ではない。しかし、判事職は世襲ではなかったとしても、父親も(著名な)判事であったケースも少なからずあるし、他の職業人にあつて、とくに男子数が三人あるいはそれ以上だと決っているわけでもないであろう。

もし私の解釈が正しいとすれば、息子数は二・五倍されるべきであり、そのなかから著名人——必ずしも父と

同職業につくとは限らない——が現われる確率(表3第三列)は四分の一に減って一二% (または一二二人) になるであらう。また、これに伴って、孫(男)、曾孫(男)の期待数はより多くなり、著名人の出現確率はより低くなるであらう。

以上からして、ゴールトンは当の著名人の直系男子に著名人の現われる確率を過大に計算していた、と言わなくてはならない。(なお註22に記したとおり、当人以外に著名な係累のいないケースを考慮すれば、この確率はいっそう低くなるのである。)

この批判が当たらないとすれば、それは一七一一九世紀中葉の間に英国の判事、あるいは知識人の家族において、子供数の遞減が生じつつあったという場合であらう。たとえば、男女合わせて五人から二三人へという減少傾向が認められるなら、ゴールトンの一人息子という想定もあながち不当ではない。しかし、はたしてそうであつたか、私は知らない。

なお、すでに本文で触れたように、判事という特定職の平均値を外国人をも含む他の知識人の場合にまで適用することにも、疑念を抱かざるを得ない。

補論2 ゴールトンと福澤における

遺伝もしくは血統と教育

ゴールトンは、知的能力が遺伝することを実証しようとして、『能力遺伝論』を著わした。福澤はそれを読み、血統の重要性を裏付ける証拠として、二六〇年の伝統をもつ士族、ないし士風を明治日本の発展に活用せよとい

う、提言の抛りどころの一つとした。

しかしながら、かりそめにも曲ったことをしないという、サムライ・ピューリタニズ（G・ドロップス）は遺伝によるよりはむしろ家風といった、家庭での躾や日常の教育によるところが多いものであろう。ゴールトンは科学者の家系を追って、おもしろい傾向を見いだしている。科学者四三人——正しくは著名人の親族が見いだされた科学者の数であるが——のうち、著名な祖父は一人しかいなかったのに対し、外祖父は五人を数え、四三人中八人——ベイコン、ビュフォン、コンドルセ、キュビエー、ダランベール、フォーブス、グレゴリ、ワット——の場合、「両親のうち母親の方が有能であった」と（ゴールトン、一九六ページ）。またプロディ、ジュシェウは顕著な祖母をもち、ニュートンの著名な親戚は母方の系累であった。「それゆえ、ひとが科学で成功するためには、有能な母を持つことがきわめて重要であるように思える」なぜなら、そういう子供は「あれこれに疑問を持ってはいけません。疑り深いのは悪いことよ」といった類いの、盲従を強いる躾を母親から受けないので、科学者として成功しやすいのだと、ゴールトンは信じているという。そしてまた、「同等の能力をもつ二人のうち、真理を愛する母を持つものは科学者のキャリアを辿りやすく、他方の極で、狭隘な環境に育ったものは、中国の恵まれた子供がそうなるように、死文と化した経書読み以上のものになり得ないであろう」とも書いている（ゴールトン、一九六―九七ページ）。かれは現に「家庭教育」という言葉をこの段落で使っているが、それが遺伝でないことは言うまでもない。

ところで、「もつとも有能な科学者の父は往々にして科学とは縁がない」それでは、科学者の息子はどうか。かれらは家庭の「自在な探求という雰囲気のみで育てられた」結果、父とおなじ職業で頭角を現わすものが異常に大きな割合を示している。ゴールトンのサンプルでは、著名な息子二六人を数えることができたが、うちわ

ずかに四人が他の職業に属していたにすぎなかった。

これも幼年時の家庭教育の然らしむるところだ、という反論が出されるかもしれない。しかし、(息子は一人とみなしても)著名人とならなかつた息子一七人(=17)がいるわけで、有名・無名の差は天賦の才能の有無による、とゴールトンには反論するであろう。だが、かれらがそれを父から受け継いだのか、母からなのか、それとも父母からなのか、誰もしかとは言うことができない。

註

(1) 「第三十一編 商売実業の奨励」、第二卷八四九—八五一ページ。

(2) 「慶應義塾出身者と我国統計事業」(一九二五・四) なお、大隈宛書翰についても、同誌(一九二七・二)の「福澤先生より大隈へ」で紹介している。前年秋の大隈侯八十五年史完成記念資料並遺品展覧会で見たものという。

(3) 石河は福澤と統計学との関わりについて、横山のエッセイを読んだか、あるいは横山から聞いたとおもわれる。『万国政表』の訳者岡本約がのちの古川正雄と同一人であることを石河が横山に念押ししたことがある、と横山は「Statistik 訳字の沿革について(一)」(一九三八・七)に記している。

なお、『万国政表』の原表と、その翻訳については、日本統計協会『統計』(一九九〇・一二)、または福澤論吉協会『福澤手帖』69号(一九九一・六・二〇)所収の拙稿で論じた。『万国政表』は『明治文化全集 経済篇』(一九二九)所収。

(4) 大橋隆憲『日本の統計学』第二章(法律文化社、一九六五)、呉文炳編『呉文彪統計学論文選集』、および『著作集』全三卷(日本経営史研究所、一九七二、および一九七四)。

(5) Buckle, Henry T., *History of civilization in England*, 2 vols. (N. Y.: D. Appleton & Co., 1872-73; Original London ed., Vol. 1, 1857, and Vol. 2, 1861)

(6) ただし、*DNB*『全英伝記辞典』*The Dictionary of National Biographies*を参照すれば、この紹介は簡略にすぎると思われるので、*DNB*によって多少の補いをつけておきたい。第一に、確かにかれは書物と葉巻にかねを惜しまなかつたそうだが、①その蔵書は最高時二・二万冊に達していたものの、最終的には半減していたこと、②また葉巻は日に三本に限っていた由で、これはむしろ、生来虚弱な健康を慮つてのことであった。第二に、かれは学校嫌いで、旅こそ最善の学習の手段であると考えていたこと、第三に行く先々でその言語を学び、一九の言語を会得し、うち七つを自由に話したという。ついでながら、かれはヨーロッパ屈指のチェス・プレイヤーであ

- ったという。これらのことから、抜群の記憶力の持主であったことがわかる。第四に、かれは自分の年取（一五〇ポンド）が倍にならねば、（生まれてくるであろう）息子たちの教育費に足りぬので、それまでは独身を守ると決めており、結局のところ独身のまま没した。第五に、母の死という痛手から逃れるためのエジプトから中近東への旅——しかも、かれは友人の子息二人を教育のため滞留していた——の途中に罹ったチフスのため、ダマスカスで死んだ。第六に、一八五八年、王立研究所におけるかれの講義「智識の進歩に対する婦人の影響力」（筆者未見）は聴衆に多大の感銘を与えたという。
- (7) 丸山（前掲書、八ページ）によれば、バックルは旅行家らしく、ほかに地政学的アプローチを唱道しているが、福澤はこれにはほとんど関心を示していない。
- (8) この三つの数字は原著（二一ページ）のままであるが、五か年の平均値は二四二・四人である。なおフランスの殺人の事例に関連して、バックルはM・ケトレーの言を本文中に引用している。
- (9) 拙著『計量経済学のすすめ』（毎日新聞社、一九七〇）、二〇二ページ。
- (10) こうしたアプローチの成果の一つとして、新保博・斎藤修編『近代経済成長の胎動』（岩波・日本経済史第二巻、一九八九）を挙げておく。とくにその「概説」を参照。
- (11) 『福澤論吉と三人の後進たち』四七―五四ページ（日本評論社、一九八五）
- (12) 福澤がドクター・シモンズより借りて読んだのは、バックルと同じくアップルトン版である。Galton, Francis, *Hereditary Genius: An inquiry into its laws and consequences*, New and revised edition with an American preface (N. Y.: D. Appleton & Co., 1871)
- (13) ゴールトン——福澤は「ガルトン」と読んでいた——の伝記は *DNB* による。かれもバックルと同様に旅行好きで、初め（アフリカの）探険家として世に知られた。ただし、ロンドンのキングス・コレッジ医学校に一年在学のもの、ケムブリッジのトリニティ・コレッジで数学を学んだところはバックルと異なる。
- (14) 全集5、二二六ページ。ただし、正確にいうと、ケンブリッジの古典学優等生以下の三者、とくに競漕者（ボートマン）と相撲（レスリング）の両者は体力と智力遣伝との比較のため取り上げたものであるが、しかし小サンプルゆえ、総括表（表3）には含まれていない。
- (15) この表は、前記の九分野別の計数の合計表であるが、（転記ミスか誤植のためか）政治家の家族数を九家多く計上しているという意味で誤っている。また、各分野別の人員にも数え落しや、逆に二重計上もあるようで、十分に正確なものとはいえない。なお、この検算には石部祥子さんを煩わせた。その労苦に感謝する。
- (16) 父親は一人ゆえ、その総数は一〇〇名であり、それは期待値ではなく実際値。息子数については疑問の余地があり、したがって確率の

妥当性も検討しなければならない。補論1を見よ。

- (17) “Classification of men according to their natural gifts.” ついでに前後の章（第二、四章）のタイトルを示せば、それぞれつぎのとおり——“Classification of men according to their reputation.” and “Comparison of the two classifications.” このあとに親族各等の略号（たとえば父方、母方の祖父はそれぞれ G, g, また甥、姪は N, N, n, n 等々）を記した第五章があり、第六—一八章まで各職各類別の調査結果が述べられている。これらを各論と呼べば、第二—四章は総論であり、結論（第一九—二二章）に対していうなら第二—四章は方法論を明らかにしたものと見える。したがって、福澤は原著を倒叙形式で要約紹介しているわけである。

- (18) これは正規分布がプラス・マイナス無限大にわたって裾を引くために生じる端数にすぎない。昨今の受験競争ですっかり人口に膾炙したところの偏差値計算の場合には、零点以下と満点以上はないにもかかわらず、（標準）正規分布をあてはめているのであり、このほうがよほど粗っぽく雑な近似である。

- (19) 原書付録として三七八ページに与えられている。ただし、厳密には計算誤差のため、確率紙に描くと直線からごくわずかぶれるところがある。

もしも、福澤流に両側を二三等分しようとするれば、『ケトレーの表』の第一—六区分を二倍し（二九五、七八四）、これを中位等級とし、左右に一二区分ずつ括ればよい。この結果は表4第②列に掲げである。その第一等はゴルトンのG級と同一値（一四名）であるが、第二等は二九九名となり、F級よりやや多くなる。

- (20) 後者は『統計学辞典』（東洋経済新報社）「ゴルトン」の項におけるものである。本文後述のような著名名人の定義からして、福澤の『能力遺伝論』という訳題のほうが、より適切といえるかもしれない。

- (21) ゴルトン第一章序論（三ページ）。ここで「抜群の天才」とは「人類史上その数は四〇〇人以上に達していない」とかれば言う。また英国判事（第六章）は、ゴルトン最初の調査で、それはサンプル・サイズ（著名判事人員）、および伝記資料が豊富であったからである。

- (22) 「諸国」とはいえ、イタリヤ、ユダヤ（人）、独、米、仏等の調査が十分でないことは、ゴルトンの自認するところである——序論末段を見よ。
ちなみにゴルトンの詮索の範囲を窺うため、「科学者」（第一章）に取り上げられている四五家を列举すれば、左のとおりで、壮観である。

Ampère, Arago, Aristotle, Bacon, Bernoulli, Boyle, Brodie, Buckland, Buffon, Cassini, Cavendish, Celsus, Condorcet, Cuvier, D'Alembert, Darwin, Davey, De Candolle, Euler, Forbes, Franklin, Gallie, Geoffroy, Gmelin, Gregory, Haller, Harvey,

Herschel, Hooker, Humbolt, Hunter, Huyghens, Jussieu, Leibnitz, Linnaeus, Napier, Newton, Orsted, Pliny, Porta, Sausse, Stephenson, Volta, Watt, Wollaston.

ただし、右のうちウォオルタとウォラストンとその家系に当人以外、一人の著名人も見出せなかったもので、集計の対象とはしていない。よってサンプル・サイズは四三家となる。ほかにR・ベイコンをはじめ、ティコ・ブラーエ、コペルニクス、ガルバニ、ケプラーなど、一人の科学者の家系も調べたが、やはり著名人は見当たらなかったと、ゴールトンが右のリスト(第一章付録)の冒頭に記している。して見ると、かれの選んだ著名科学者六三人(1151+10)のうち、二〇人(1132%)は著名な係累を持たなかったことになる。逆にいえば、著名科学者の曾祖父・祖父や父、また息子や甥・孫(ともに男子)の出現確率としてゴールトンの与えている数字は三割方、過大である、ということになる。

(23) 『日本統計の沿革に就て』(一九一六・一) これは慶應義塾図書館統計(書)展覧会における横山の講演である。なお以下で、年月のみを記した横山の論文・講演・随想はすべて『三田評論』所掲。また同誌は一九一三(大正二)年以前は『慶應義塾学報』と称していたが、ここでは便宜上『三田評論』で統一。

(24) 同右。実際、同校における杉の講義(原拠 Max Haushofer, *Lehr und Handbuch der Statistik*)の横山によるノートでは移智契(または移対契)の文字が用いられている——その複製版『移智契』(日本統計協会、一九八〇)参照。

(25) 『スタチスチック雑誌』第九七号(一八八四)。これは森、藤沢、呉、今井などの関連論文とともに『明治・大正期スタチスチック雑誌』/統計学雑誌論文選集(日本統計協会、一九七九)第一部に再録されている。また、前記の『日本統計の沿革に就て』も『統計学雑誌』からそこに再々録されている。

(26) 註23の講演(二)(一九一七・二)、または前註の『選集』、二〇二ページによる。

(27) 前記『移智契』巻頭の肖像写真キャプションに「明治三一年四八歳」とあるところより逆算、並べて掲載の杉の肖像写真には七〇歳とあり、これは満年齢ゆえ横山も満年齢とみなした。

(28) 以下の学歴・職歴とも、主として『Statistik』訳字の沿革に就て(一九三八・七、八、一〇)の「はしがき」として記した自叙略伝による。慶應義塾教授職前後の職歴、とくに官歴については調査が行き届いていない。なお没年は統幸子氏の教示によると一九四三年であった。

(29) 『日本統計の沿革について』(二)(一九一七・一)次註も右による。

(30) しかしながら、同校はこれら第一回卒業生を世に送り出すと同時に閉校した。經常費を統計院職員員の「俸給の幾分の義捐」によっていたが、同院が縮小改組によって内閣統計局となったため、維持が困難になったものらしい。在学生がどうなったのか、明らかではない。

- (31) 抽稿『理財料の三〇年——一八九〇—一九二〇年』、『三田学会雑誌』八三卷三号(一九九〇・一〇)
- (32) 『呉文彦著作集』第二卷(日本経営史研究所、一九七四)所収、「著作を中心とした年譜」による。
- (33) 慶應義塾大学・教授講師執筆・経済学講義(時事新報出版部)の一冊。刊行年月は奥付がなく不明。一九二〇年代はじめか。推定の根拠は本文にて後述。
- (34) 卷末(三九二ページ)に、他の「各論があれど既に予定の第一学年も本号が終刊であるから遺憾ながらこれで筆を擱く」とある。ここに「第一学年」とあるのは、一九一六(大正五)年——この年は横山が呉と交代した年度であるが——のカリキュラム改訂で、統計学は第一学年配当の科目(ただし、依然必修)になったからである。また末尾に「本号が最終刊」とあるからには、『統計学』は毎回の講義録を合本したものと見られる。
- (35) これからして、本書の刊行は国勢調査の実施された一九二〇(大正九)年以降の数年であったことがわかる。また鈴木一江氏の調査によれば、この講義シリーズ中の他の一冊(西北辰之助『商法』は一九二四、五年の刊行であるという。『統計学』の刊行もほぼ同じ頃と見て良い)。
- (36) 甲の第二、三、四章。このあとに前記の国勢調査に関わる三章(第五、六、七章)が配されている。
- (37) Garret Dropers, "The Population of Japan in the Tokugawa Period." *Transactions of the Asiatic Society of Japan*, vol. 22, pt. 2 (1894). なお、タルサス法則については横山は、甲の第七章国勢調査の結果の一小節「人口の増減」において、「抑制的」人口政策との関連で取り上げている。
- (38) 前出『統計学辞典』「ピアソン」の項参照。
- (39) その『統計学の理論と方法』(有斐閣、一九三九)、第八、九章・相関々係を見よ。
- (40) この両年中の寄稿は「国勢調査に就て」(一九〇〇・一〇・一二)、統計譚淵(一)(一九〇一・一一・一二)である。前者は「論説」、後者は「散録」。なお、一九〇二年二月号に「本邦の自殺統計に就て」(講演)があり、一九〇二五年の夏期(六、七、八月号のいずれかに)「各国々勢一斑」(散録)が掲載されているが、これは「政表」風の統計一覧である。
- (41) 論説5と6の間には、「本邦国勢調査問題の沿革」(一九一〇・六、一九一一年・三、四)と、「日本統計の沿革に就て」(一)——(三)——(一九一六・一一、一九一七・一一、二)がある。それゆえ、一九一〇—一一年から、呉に代わって講師——6では教授となっているが——になるまでの五、六年間はまったく寄稿がない。この間は文字どおり疎遠になっていたわけである。
- (42) このあと、なお書きの形で「慶應義塾出身者及関係者」として、つぎの一七名の氏名を記している。犬養毅、尾崎行雄、久原房之助、武藤山治、平出喜三郎、森恪、高橋岩成、堀切善兵衛、高山長幸、松田三徳、山田又司、戸田由美、木暮武太夫、隆旗元太郎、板谷順助、

松実喜代太、亀井貫一郎。

- (43) この直前(一九三〇・二)には「福澤先生を偲びて」という寄稿がある。(なお本稿は『三田評論』の地方への普及ぶりを語っているにもかかわらず、同誌「総目次」(慶應義塾、一九八〇)の著者別索引には漏れている。そのことに気付いたのは山根秋乃さんである)なお、かれの講義は理財科のみならず、政治科の学生も聴講していた。後者の学生たちは以上一連の選挙分析を読んだであろうか。
- (44) 「小林義直宛岡田吉頭書翰」(全集21、三三八―四〇ページ)この申込みは明治三年のことであった。なお岡田の治績については、同書翰への全集編集者註があり、また横山自身「慶應義塾と福山藩との関係」(一九二七・一二)において、岡田の「学制論」(『藩治本論』の一部)を紹介しつつ詳論している。また杉山からの聞き書きとして、横山は同藩主(のち藩知事)阿部正恒、土族五十川基、山岡謙介、江木高遠などが慶應義塾に入った、と述べている。復刻『慶應義塾入社帳』によって見ると、五十川、山岡はそれぞれ慶応二年、明治二年に入社している。
- (45) 「福澤先生の珍しき芳翰及山田十竹の福澤先生の詩評」(一九二五・一)この講演が七年もあとになって活字になったのは、なぜか不明である。なお、全集ではここに引用した最終文が「朱書」であったことは註記されていない。また、ちなみに本講演タイトルの後半は、芸藩々儒山田十竹の詩による福澤論吉評のことである。
- (46) 「福澤先生に関する事ども」(一九二九・二)
- (47) 細谷新治「杉先生小伝」および同「略年譜」『抄智叟』復刻版別冊所収。
- (48) 念のため出典を再記すれば、「慶應義塾出身者と我國統計事業」(一九二五・四)三ページ。
- (49) 註3所掲の拙稿、とくに後者による。なお私見によれば、「蛮野文明の別」では文明の発展段階説が、また「各国の言語」では世界の社会言語学が、さらに英仏漢普魯および米の比較においては簡潔ながら、その政治・経済比較が与えられており、単なる統計書に止まるものではないが、それらについては詳説を省く。
- (50) 寺尾前掲書(註39)、第一章第四節の表題による。